



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴史家 しらこまひとみ **白駒妃登美**

自己犠牲の夫婦愛

戦国最強軍の娘・立花闇千代 たちばなぎんちよ ②

数年前のこと。プロ野球の阪神タイガースの監督をしていた吉田義男よしおさんのインタビュー映像を見たことがあります。

吉田さんはかつて、フランスの代表チームを率いたことがあります。それについて、「フランス人に野球を教える上で一番難しかったことは？」と問われ、「送りバント」と答えたのが印象的でした。

自らがアウトになる代わりに味方を進塁させる送りバント。フランス人にとってはその技術が難しいのではなく、その精神性、つまり自分がアウトになることが分かっているながら、なぜバントをしなければいけないかが分からないというのです。

そのインタビューを聞き、私はあらためて日本人は自己犠牲の精神に富んだ民族だと感じました。そしてこの精神性は、歴史の中で、実に多くの日本人が体現してきたことなんです。その一人が立花闇千代たちばなぎんちよであ

り、今回は彼女の「自己犠牲の夫婦愛」をご紹介しますと思います。

別居を決めた理由

立花家の一人娘・闇千代は、宗茂むねしげを婿養子として迎えますが、父・道雪みちゆきの死後、夫婦は程なく別居します。二人の性格が似すぎていたとか、側室を持った宗茂に彼女が激怒したなど、別居の理由にはさまざまなお説がありますが、どれも夫婦が不仲だったという点では共通しています。

しかし私はむしろ、闇千代は宗茂を愛している、別居こそが彼女の愛のカタチだったのではないかと考えています。子供が授けられなかった闇千代は、側室を持ってでも家を栄えさせなければならぬ宗茂むねしげを慮り、身を引いたのではないのでしょうか。

その根拠は、柳川やなぎがわにある「三柱神社」の



立花闇千代 (1569-1602) 筑後国(福岡県久留米市)を治め、戦国最強といわれた立花家の一人娘。現在、立花家邸宅跡にある料亭旅館「御花」は、観光名所としても賑わっている。

【イメージイラスト】アオジマイコ